

金沢大学大学院法務研究科
2018年度「法理学」定期試験
2019年1月30日(水) 8:45-10:15 実施
出題: 足立英彦(70点満点)
解答・解説

1. 次の語句を説明しなさい。(各3点)

(a) 自由

解答 作為が許されており、かつ不作為も許されている地位。

(b) 可能世界の完全性

解答 ある可能世界が完全であるとは、任意の命題 X が、その可能世界で真か偽のいずれかの値をとるということである。いいかえれば、いかなる事柄に関してもそのありようが決まっている場合、その世界は完全である。

解説 排中律(任意の命題 X について、 $X \vee \neg X$ が真)が成り立つ世界のことである。

(c) 権限

解答 権限とは、一般的規範や個別的規範を制定、変更、廃止することによって、自分や他人の規範的地位に変更を加える能力のことである。

(d) 責務

解答 責務とは、権限を有する者が定めた規範に従わなければならない地位、いいかえれば、権限を有する者の指示に服従しなければならない地位のことである。

(e) 根本規範

解答 根本規範とは、歴史上最初の憲法制定者にその憲法を制定する権限を与える規範のことである。そのような規範は実際に定められてはいないが、そのような規範があることを想定しないと、その憲法自体や、それより下位のあらゆる一般的・個別的法規範を、真偽が定まる命題としての「法規範」として認識できなくなってしまう。根本規範は、憲法を頂点とする法秩序に属する規範を「法規範」として認識している者が必ずその存在を認めなければならないという意味で、その認識を構成する前提である。

(f) 排他的規範競合

解答 規範の競合とは、複数の規範のそれぞれの要件が一部または全部一致することである。このような場合、一つの事実に対して複数の規範が関係することになるので、どの規範が適用可能なかを検討しなければならない。この規範競合の一種である排他的規範競合は、一方の規範の要件が他方のそれより特殊であるとみなせる場合の規範競合のことである。一方の要件が他方のそれより特殊であるとは、前者に該当する事実の集合が、後者に該当する事実の集合の部分集合であるということである。両者のこのような関係は、前者の要件に、後者の要件を構成する条件がすべて含まれ、さらに前者には少なくとももう一つ別の条件が含まれる場合に成立する。法規範に関してこのような競合があり、より特殊な要件に該当する事実がある場合には、「特別法は一般法を破る」という原則に従い、より特殊な要件を定める法規範が適用され、より一般的な要件を定める法規範は適用されない。

(g) 類推推論

解答 類推推論とは、ある法令がある特定の要件 (T) にある特定の法的効果 (V) を結びつけている場合に、T と類似した S を要件、V を効果とするる命題を形成することである。

2. 次の問に答えなさい。(各5点)

- (a) 義務様相の六角形を描きなさい。ただし義務演算子は O だけを使い、「 \sim が \sim をする」という命題を V とする。六角形のそれぞれの頂点に位置する規範間の相互関係の種類も明記せよ。

解答 図は省略*1。作為義務(命令)と不作為許可, 不作為義務(禁止)と作為の許可, 自由と不自由は否定の関係にある。作為義務と不作為義務, 不作為義務と自由, 自由と作為義務は反対の関係にある。不自由と作為許可, 作為許可と不作為許可, 不作為許可と不自由は小反対の関係にある。作為義務は作為許可と不自由を含意し, 不作為義務は不作為許可と不自由を含意し, 自由は作為許可と不作為許可を含意する。

- (b) 「V をしないことが許されている」という命題が偽である場合, 義務様相の六角形の他の5つの頂点に位置する規範の真理値を書け。

解答 OV (作為義務): 真, $O\neg V$ (不作為義務): 偽, $\neg O\neg V$ (作為許可): 真, $OV \vee O\neg V$ (不自由): 真, $\neg O\neg V \wedge \neg OB$ (自由): 偽。

解説 問は $P\neg V$ ($\neg OV$) が「偽」の場合であることに注意。

3. 次の文を, 様相を意味する語や記号を用いないで言い換えよ。(各3点)

- (a) 「ある世界 w で V は必然的である」が真である。

解答 w から到達可能なすべての可能世界で V は真である。

- (b) 「ある世界 w で V は偶然的である」が真である。

解答 w から到達可能な少なくとも一つの可能世界で V は真であり, その可能世界と異なり, かつ w から到達可能な少なくとも一つの可能世界で V は偽である。

解説 可能世界は整合的であるので(そうでなければ個々の可能世界においてあらゆる命題が真になってしまう), V と $\neg V$ が同時に真となる(Vが真であり, 同時に偽でもある)ような世界, すなわち非整合的な世界は可能世界ではない。

- (c) 「ある世界 w で V は許されている」が真である。

解答 w から到達可能な少なくとも一つの理想世界で V は真である。

解説 「理想」世界であることを書いていない答えは2点減。

4. 私人の権限と国会の権限について説明した上で, 両者の共通点と違いについても説明しなさい。(15点)

解答 私人が有する権限と国会が有する権限は, ともに規範を創造する権限であるという点では同じである。また, その権限によって他者になんらかの義務を課す場合, その義務を課される他者の同意を必要とするという点も同じである。

他方, 私人が有する権限は, 特定の人を義務づける個別規範(契約)を定める権限であるのに対して, 国会が有する権限は, 不特定のすべての人を義務づける一般規範(法律)を定める権限である。この違

*1 ヤン・C・ヨエルデン(足立英彦訳)「義務を超える(功徳的)行為 [supererogation] の論理について」金沢法学 56 巻 1 号 (2013 年) 81 頁の図を参照してください。

いには、同意のあり方の違いが反映している。私人は、義務を負う特定の相手方の同意を得てはじめて、その相手方を義務づけることができる。私人が不特定のすべての人から直接同意を得ることは、個人の能力の限界を考慮すれば事実上不可能であり、したがって私人に一般規範を定める権限を与えることは不可能である。これに対して現代の民主主義国家の国会は、国民が選挙を通して選んだ国会議員で構成されており、その過半数の議員が定める法律には、その議員を選んだ国民の、したがって相対的多数の国民の間接的な同意が与えられているとみなすことができる。このことを主要な根拠として、国会には一般規範を定めることによって不特定のすべての人を義務づける権限が与えられている。

解説 2016 年度法務研定期試験で同じ問題を出した。共通点に 8 点、違いに 7 点を配点した。

5. 個別事例に対する規範的な判断が正当であると評価されるために、その判断はどのような条件を満たしていなければならないか。(3 点)

解答 ある個別事例に対する規範的判断が正当であるためには、論理的な推論の結果であること、その論理的推論の前提に少なくとも一つの全称量化された条件つき命題が含まれていること、論理的推論の前提がすべて真であること、という 3 つの条件が満たさされることが必要である。

6. 法令から導ける命題を「T ならば V である」($\forall x(Tx \rightarrow Vx)$) とする。この命題を語の実際の用法に基づいて解釈する場合の「必然的な解釈」「不可能な解釈」「偶然的な解釈」について説明しなさい。(12 点)

解答 法令から導ける命題「T ならば V である」を R とする。また、T という語の実際の用法の一つである「S ならば T である」($\forall x(Sx \rightarrow Tx)$) を W とする。また、W に基づく R の解釈 ($\forall x(S \rightarrow V)$) を R' とする。すべての人が W に同意する場合、R' は R の必然的な解釈である。誰も W に同意しない場合、R' は R の不可能な解釈である。すべての人が W に同意するというわけでもなく、かつ、誰も W に同意しないというわけでもない場合、R' は R の偶然的な解釈である。

解説 T の語の用法 (W) ではなく、法令から導ける命題 (R) の解釈 (R') の必然性・不可能性・偶然性の説明を求めている点に注意。

以上

参考情報 (2019 年 2 月 8 日現在)

履修登録数	定期試験受験者数	放棄	定期試験平均点	総合平均点
5	5	0	52.0	72.0

定期試験上位得点者: 69 点 1 名。